3 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究

研究分担者
西田　一雄（日本赤十字社 血液事業本部）　平成 27 年度
井上　慎吾（日本赤十字社 血液事業本部）　平成 28 年度・29 年度

研究協力者
松山　勇樹（日本赤十字社 血液事業本部）平成 27 年度
早坂　　勤（日本赤十字社 血液事業本部）平成 29 年度
松田　清功（日本赤十字社 血液事業本部）平成 28 年度・29 年度

研究要旨

日本赤十字社が実施する供血者を対象とした量的・質的調査を通じて、献血の促進及び阻害因子への理解を深め、効果的な献血推進に関する研究に資することを目的とする。平成 27 年度は、インターネット調査等による、献血推進広報効果と献血の促進及び阻害因子に関する分析を試みた。平成 28 年度は、「献血推進 2020」への取り組みにかかる献血の促進及び阻害因子の分析、平成 29 年度は効果的な献血推進における、各都道県の取り組みの事例集をまとめた。

研究目的

日本赤十字社が実施する供血者を対象とした量的・質的調査を通じて、献血の促進及び阻害因子への理解を深め、効果的な献血推進に関する研究に資すること。

研究方法

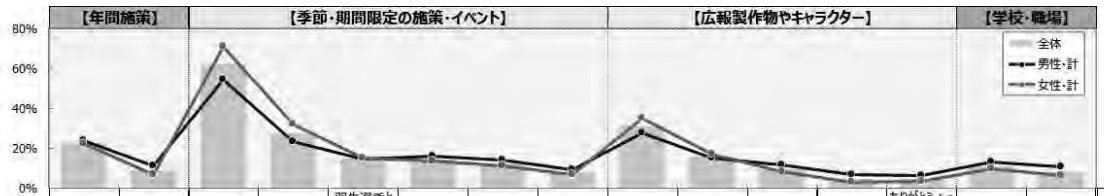
全国の献血可能年齢（16 歳～ 69 歳）の男女を対象
対象者数
- 献血会場にてアンケートを依頼⇒ 14,337 人
- インターネット調査　　⇒　6,197 人
（献血未経験者は 3,056 人）

平成 28 年 1 月 22 日～平成 28 年 2 月 22 日の期間に「献血推進 2014」及び「献血推進 2020」への取り組みに係る献血の促進及び阻害因子に関する調査を行い分析した。

1. 献血推進広報効果調査

(1) 目的

以下の内容について調査し、各広報施策の認知や提供情報が献血行動に及ぼす影響について分析する。（図 1）
① 過去 1 年程度の間に実施された各広報施策の認知度
② 過去 1 年程度の間の献血行動の有無
③ 献血行動に各広報施策が与えた影響または献血行動を阻害した要因
④ 各広報施策を通じて得たどのような情報が役に立ったか



		サンプル数	LOVE in Action プロジェクト	ガクケン	はたちの献血	Power of 献血	羽生選手と共にいのちと献血の大切さを考えるイベント	世界献血者デー	愛の血液助け合い運動	赤十字・いのちと献血俳句コンテスト	けんけつちゃん	愛のかたち献血	献血情報誌「献血 Walker」	献血ドキュメンタリームービー「エール」	ありがとう！っていっぱい言わせて(アンパンマンのエキス)	献血セミナー	献血サポーター	平均反応数
全体		6194	22.9	8.9	62.6	27.5	14.7	14.7	12.5	7.9	31.3	15.8	9.6	4.6	4.6	11.1	8.1	2.6
性年代別	男性・計	3097	23.8	11.1	54.2	23.1	14.3	16.0	13.8	9.3	27.5	14.9	11.4	6.6	6.1	12.7	10.3	2.6
	男性16-19才	258	35.7	21.7	53.5	32.9	22.5	26.7	17.4	18.2	58.5	30.2	14.3	14.0	14.0	20.9	14.3	3.9
	男性20代	568	35.9	18.7	52.6	27.1	17.4	22.4	15.1	12.3	44.9	22.0	13.7	10.2	8.6	19.5	13.6	3.3
	男性30代	568	28.7	12.0	58.3	24.6	13.6	18.0	12.9	10.9	30.1	15.8	13.6	8.8	7.9	13.2	12.9	2.8
	男性40代	568	22.0	6.9	53.3	20.2	11.1	12.9	12.0	6.9	22.0	10.0	8.8	3.2	3.7	8.6	7.9	2.1
	男性50代	568	15.0	6.5	54.0	20.2	11.6	11.4	12.7	6.0	15.5	11.1	8.3	3.2	3.2	6.2	6.3	1.9
	男性60代	567	12.0	6.5	53.1	18.5	14.3	10.2	14.8	6.2	11.1	8.6	11.5	4.4	3.4	12.3	9.0	2.0
	女性・計	3097	22.1	6.7	70.9	31.9	15.1	13.4	11.1	6.5	35.1	16.8	7.8	2.5	3.1	9.6	6.0	2.6
	女性16-19才	258	40.3	17.1	64.3	34.1	23.3	20.2	14.0	12.8	74.0	38.0	10.1	7.0	6.6	16.3	9.7	3.9
	女性20代	568	33.6	9.7	71.3	31.0	10.6	17.8	8.3	6.2	57.2	24.3	7.0	3.5	2.8	8.8	5.1	3.0
	女性30代	568	24.8	3.9	72.2	24.3	8.5	12.3	8.8	5.6	38.9	13.0	5.5	1.2	1.2	6.7	3.7	2.3
	女性40代	568	19.2	4.6	69.9	34.5	13.2	10.9	10.6	5.8	30.1	14.1	6.0	1.9	2.5	7.6	5.6	2.4
	女性50代	568	13.0	5.8	72.4	31.3	17.6	10.9	12.3	5.1	19.2	12.5	6.3	1.2	2.1	8.8	7.2	2.3
	女性60代	567	11.3	4.9	71.8	37.2	22.2	11.8	14.3	6.7	12.2	10.2	13.4	2.6	5.1	12.9	6.5	2.4

図 1

⑤各広報施策を通じてどのような情報をもっと得たら良いか

2. 平成 27 年度の広報施策認知度：全体ベース

＜対象者：全員＞

◆「はたちの献血」の認知度は約 63％で突出している。「けんけつちゃん」の認知は 3 割である。

◆平成 27 年～平成 28 年の施策・イベント・広報物の認知度を全体でみると、「はたちの献血」の認知度が約 63％と最も高くなっている。次いで「けんけつちゃん」(約 31％)、「Power of 献血」(約 28％)、「LOVE in Action プロジェクト」(約 23％) が上位にあがる。

◆性年代別でみると、「はたちの献血」は男性よりも女性に認知されている。また、男女ともに 20 代以下で各施策・イベントなどの認知が高くなっている。一方で、10 代では「献血セミナー」からの認知率が他の世代に比べて比較的高いことがわかった。

3. 献血に行ったことがない理由（図 2）

＜＜対象者：献血未経験者＞＞

◆「怖い、痛そう、副作用が不安」という意識が強く、献血への不安感が大きい。

◆献血未経験者の献血に行ったことがない理由をみると、「針や採血が怖い、痛そう、副作用が不安だから」が約 29％でトップ。次いで、「調べたら、献血できる条件が合わなかったから」(約 18％)、「献血できる場所や時間、条件などが分からないから」(約 11％) の順であった。

4. 献血に行かなくなった理由（図 3）

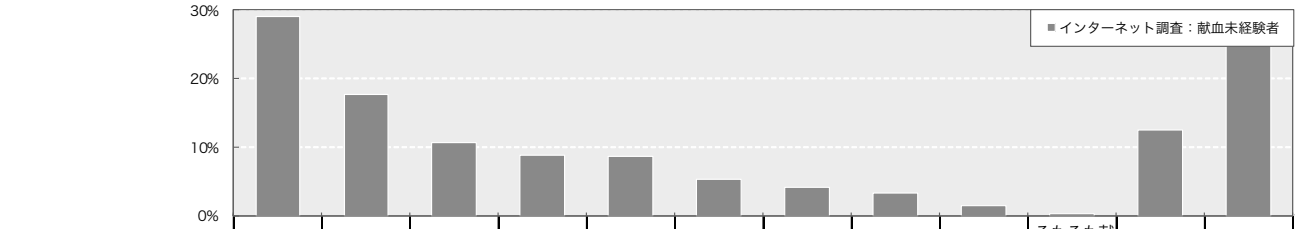
＜対象者：献血経験者で昨年献血に行かなかった人＞

◆「条件が合わなかった」、「場所や時間が合わなかった」が行かなくなった理由の上位。

◆献血経験者で昨年献血に行かなかった人の「行かなくなった理由」は、「献血できる条件が合わなかったから」が約 30％と最も高くなっている。次いで、「献血できる場所や時間が合わなかったから」が約 25％で続く。「特に理由はない」という方も約 23%と高い。

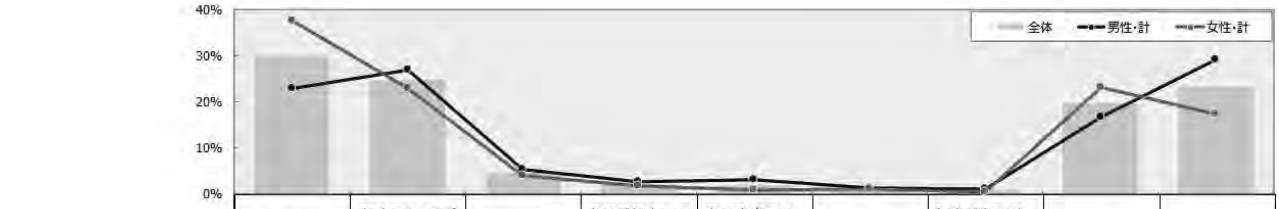
◆性年代別でみると、男性よりも女性で「献血できる条件が合わなかったから」が高くなっている。

◆「献血できる場所や時間が合わなかったから」が 20 代男女・30 代男性が高い。



	サンプル数	針や採血が怖い、痛そう、副作用が不安だから	調べたら、献血できる条件が合わなかったから	献血できる場所や時間、条件などが分からないから	会場や呼び込みの雰囲気が入りづらかったから	病気が移らないか心配だから	自分自身にメリットがない、見返りがないから	関心がない、自分には関係ない、誰かがやってくれるから	調べたら、献血できる場所や時間が合わなかったから	献血がどう役立つのか、なぜ必要なのかわからないから	そもそも献血を知らない、聞いたことがない覚えていないから	その他	特に理由はない
インターネット調査：献血未経験者	3056	29.1	17.7	10.6	8.8	8.7	5.2	4.1	3.3	1.4	0.3	12.5	24.9

図 2



		サンプル数	献血できる条件が合わなかったから	献血できる場所や時間が合わなかったから	以前の献血で嫌な思いをしたから	自分が献血しなくても誰かがやると思ったから	自分自身にメリットがない、見返りがないから	家族や友人に止められたから	献血がどう役立つのか、なぜ必要なのかわからないから	その他	特に理由はない
全体		1920	30.0	25.0	4.6	2.1	1.9	1.2	0.8	19.8	23.4
性年代別	男性・計	990	22.8	26.9	5.3	2.6	2.9	1.3	1.1	16.7	29.1
	男性16-19才	11	—	27.3	18.2	—	9.1	—	—	18.2	27.3
	男性20代	71	9.9	39.4	11.3	5.6	9.9	1.4	1.4	15.5	22.5
	男性30代	139	17.3	34.5	5.0	2.9	5.8	1.4	0.7	13.7	28.1
	男性40代	210	16.7	32.9	7.1	2.9	2.9	1.4	1.4	12.9	31.9
	男性50代	262	28.6	29.0	4.6	3.4	1.1	1.9	—	12.6	27.1
	男性60代	297	28.6	14.1	2.7	1.0	1.3	0.7	2.0	24.6	31.0
	女性・計	930	37.6	23.0	3.9	1.6	0.8	1.1	0.4	23.1	17.3
	女性16-19才	12	25.0	16.7	8.3	25.0	—	8.3	—	8.3	16.7
	女性20代	76	34.2	42.1	5.3	3.9	—	1.3	—	22.4	10.5
	女性30代	144	38.9	25.7	1.4	0.7	0.7	1.4	0.7	25.0	14.6
	女性40代	217	32.3	26.7	4.1	0.9	1.4	0.5	0.5	24.9	15.7
	女性50代	250	36.0	21.6	5.2	1.6	1.2	2.0	0.4	22.8	19.2
	女性60代	231	45.5	13.4	3.0	0.9	—	—	0.4	21.6	20.8

図 3

5. 献血に協力する上で、後押しとなる情報【複数回答】
＜対象者：全員＞

◆ 経験者には献血場所の周知等、献血未経験者には、「痛みや副作用」に対する情報が有効。献血に協力する上で後押しとなる情報をみると、各層ともに「近くに献血できる場所があること」「血液は人工的に作れないこと」「血液には有効期限があり、絶え間ない献血協力が必要であること」「検査結果通知等のサービス」が上位にあがる。

◆ 献血関与の低い未経験者では「採血の痛みや副作用の可能性と対策」を求める割合が高い。

◆ 全体の傾向としては、「血液は人工的に作れないこと」や「血液には有効期間があり、絶え間ない献血協力が必要であること」、「献血された血液がどのように使われているか」は、献血未経験者への情報として発信していくことが極めて重要である。

２９受初健食第１２号
平成２９年１２月１１日

各都道府県・指定都市教育委員会教育長
各　都　道　府　県　知　事
附属学校を置く各国立大学長
附属学校を置く各公立大学法人の理事長　殿
各国公私立高等専門学校長
構造改革特別区域法第１２条第１項の認定を受けた各地方公共団体の長

文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課長
三　谷　卓

高等学校等における献血に触れ合う機会の受入れについて（依頼）

標記について、平成２９年１１月２７日付け薬生血発１１２７第１０号で厚生労働省医薬・生活衛生局血液対策課長より別紙（写）のとおり、依頼がありました。
ついては、この趣旨を御理解いただき、高等学校（中等教育学校及び特別支援学校を含む。以下同じ。）及び高等専門学校において、献血に触れ合うための機会を積極的に受け入れていただけるよう、よろしくお取り計らいください。
このことについて、都道府県・指定都市教育委員会におかれては、所管の高等学校及び域内の市区町村教育委員会に対して、都道府県知事及び構造改革特別区域法第１２条第１項の認定を受けた各地方公共団体の長におかれては、所轄の高等学校に対して、附属学校を置く各国立大学長及び各公立大学法人の理事長におかれては、その管下の高等学校に対して、周知されるようお願いします。

図 4

図 4 は平成 29 年 12 月に文部科学省初等中等教育教育局健康教育・食育課から全国の教育主管課へ「高等学校等における献血に触れ合う機会の受入れについて」の通知である。血液事業本部では、この通知を効果的に運用するためには、全国で若年層対策として効果を上げている事例を集めて、各都道県にて水平展開することが有効であると判断した。（図 5）

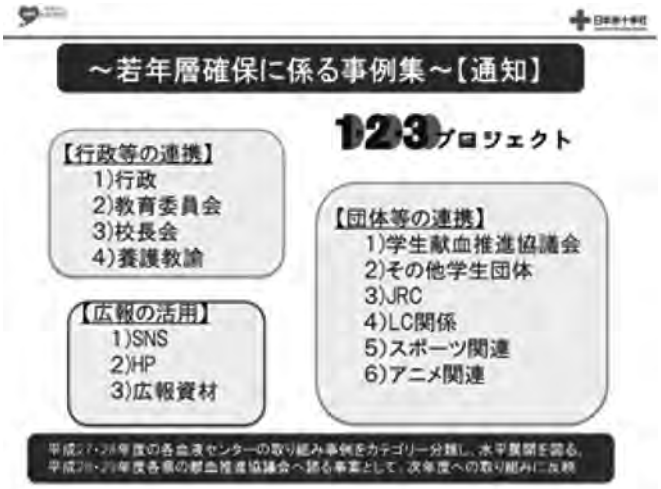


図 5

◆ 平成 29 年度は、各血液センターが実施している若年層献血者確保対策等の優良事例を全国で水平展開をして情報共有をすることが最も重要であると考え、平成 29 年 2 月に事例（約 60 事例）を「行政等の連携」、「団体等の連携」、「広報の活用」の 3 つに分類して事例集を作成し、平成 29 年 2 月に各血液センターあて通知した

◆ 各都道府県の献血推進協議会での提案や都道府県・献血推進団体等において事例の水平展開が迅速に出来る構成としていることから献血教育はもとより、献血推進の具体事例を積極的に活用することが重要となる。

◆ 献血推進協議会等を通じて、行政や関係団体、また、教育機関への働きかけが期待できると考える。

考 察

平成 28 年 1 月に実施したインターネット調査においては、献血経験者・献血未経験者から「献血に行ったことがない理由」、「献血に行かなくなった理由」、「献血に協力する上で、後押しとなる情報（複数回答）」などの献血促進および阻害因子を探ることができた。

国の中期目標「献血推進 2020」には若年層の献血率と併せて、献血セミナーの実施回数についても目標値が設けられた。

全国の教育主管課へ「高等学校等における献血に触れ合う機会の受入れについて」の通知は、高校生の献血推進に役立てることが出来るが、どのように具体的に高校生等を中心とした 10 代の献血者確保につなげるかは、各都道県の行政と血液センターが連携を取り、働きかけを強化していくことの継続と考えている。

実施できる範囲や可能性には、限界もあることから、今後の戦略としては、小学生・中学生の義務教育の中で、児童や生徒が直接目に触れて、「いのちの大切さ」と「輸血や献血」について、学べるための資料を作成し、学年単位での全数配布（1 学年を約 100 万人）を行い、国民運動としての礎を構築していくことが、大切であると考えている。

結 論

◆ 若年層の献血推進は喫緊の課題として、国の中期目標が平成 17 年から立てられ、様々な施策が行われてきた。

　今回の調査から得られたことは、広報施策認知度の中で「10 代では献血セミナー」からの高校生の献血意識に関する調査認知率が他の世代に比べて比較的高いことが解った。

◆ 高校生の献血意識に関する調査 （竹下明裕ら）が行った調査からも、学校で献血に関する授業や血液センターが出張して行われるセミナーを受けた記憶のある高校生は全体で 9.0%，記憶のない者は 89.9% であった。献血経験のある群では記憶のある高校生

は21.8%で、ない群の7.6%を上回った（$p < 0.0001$）（Fig. 2E4）。一方，47.1%の高校生が献血に関する授業やセミナーの受講を希望していた。[1)]

◆国民教育として、献血教育を根付かせるために、献血セミナーを実施するにあたり献血啓発DVDやスライド等の教材を「小学生用」、「中学生用」、「高校生以上」等に分類し、教員へ提供で出来るような教材作りをする必要がある。

◆赤十字職員だけでは、献血教育を行ううえで限界もあることから、学生献血推進ボランティアやライオンズクラブ等の方々の協力を得ながら、献血セミナーの実施回数を増やしていく考え方がある。

◆更には献血セミナーを通じた献血啓発が進む中で、教職員も使用できるような献血教育資材の提供をめざして、厚生労働省・文部科学省と献血教育の普及にかかる様々な方策を実行していく必要がある。

文　献

1）Japanese Journal of Transfusion and Cell Therapy, Vol. 62. No. 6 62（6）：711―717, 2016

健康危険情報

該当なし

研究発表

該当なし

知的財産権の出願・取得状況　（予定を含む）

該当なし